

高大連携教育研究

米田 俊彦（お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科）

玉谷 直子（お茶の水女子大学人間発達教育研究センター）

お茶の水女子大学では、附属高校と大学の合計7年間の特別教育プログラムを設定し、附属高校2005年度入学者から実施してきた。高校教員と大学教員が協力して編成した「教養基礎」科目の履修（全生徒を対象）、希望者に対する「選択基礎」科目の履修、高大連携特別推薦入試を経て第1期生8名が2008年度に本学に入学し、2009年度は第2期生7名が入学した。この特別教育プログラムは大学による研究活動として実施され、人間発達教育研究センター子ども発達教育研究部門がプログラムの諸側面について調査研究を行うことになっている。調査研究にあたっているセンター員は米田俊彦（大学院人間文化創成科学研究科教授）・富士原紀絵（同准教授）・玉谷直子（本センター講師）・石井朋子（附属高等学校副校長）・荻原万紀子（附属高等学校教諭）・植田敦子（同前）・大戸吉和（同前）・土方伸子（同前）・溝口恵（同前）である。

この特別教育プログラムに関連して、大学と附属高校の連携教育の取り組みとして、附属高校生対象のキャリア・ガイダンス、校長による進路相談、公開授業なども行われている。これらの取り組みの成果についても本センターが調査を行っている。

今年度実施した調査研究活動の概要は次の通りである。

【基礎調査】

高大連携プログラムの基礎調査として、高等学校各学年末に「学習に対する意欲・実態に関する調査」を実施している。調査内容は、毎日の学習内容、学習量、学習方法、生活、様々な事柄に対する意識、進路に関する希望など、多岐にわたっている。基礎調査については、収集したデータの活用、項目の検討が課題となっていた。そのため、今年度は、特別プログラムを実施することにより、生徒の学習意欲や学習態度、学力にどのような影響が出たと確認できるのか、他の調査や学力調査とも合わせて、基礎調査を活用する方法の開発に取り組んだ。データが膨大であり、まだ成果は出ていないが、活用する方法が見えてくると、調査項目の検討も可能になると考えている。次年度以降もこの取り組みを継続したい。

【キャリア・ガイダンス】

◇附属高校生向けキャリア・ガイダンスに関するアンケート

高校生が大学の学科等に出向き、大学で何をどのように学び、それが将来のどのような進路につながるかといった説明を受ける「キャリア・ガイダンス」を実施している。2009年度は12月16日に行った。1年生は全員が、2年生は希望者（12名）が参加した。

実施直後にアンケート調査を行い、かつ感想文を書いてもらった。アンケートの内容は今年度より改訂し、ガイダンスの内容が理解できたか、興味があるか、満足したか、役に立ったかについて、それぞれ4段階でその程度を質問するものとした。いずれの項目についても、回答者の9割以上がプラスの評価をしている。感想文には、大学の研究室や実験室を直接見て、そこで大学の教員から直接学問の話聞く体験ができたことを率直に喜ぶような記述が多かった。

◇校長による個別進路相談に関するアンケート

附属高等学校の生徒や保護者が大学教員である校長から大学について具体的な話を聞く機会として、校長による個別進路相談を1学期と2学期に行っている。2009年度も、浜谷望校長による個別進路相談を実施し、19名の生徒が面談を受けた。事後のアンケートによると、生徒、保護者ともに好評であった。特に、大学が求める人材、大学が考えていることを、大学教員から直接聞いたことが高く評価された。また、事前に相談内容を伝えることになっているため、面談時には、一般論にとどまらず、個々の進路希望や不安に応じて、実際的かつ内容の濃い面談が行われた点も評価された。

【公開授業】

2009年度も、附属高校生向けに公開している「比較文化史」「英語圏言語文化概論」「児童学概論」「ドイツ語初歩」等の授業を、前期にはのべ32名、後期はのべ21名の生徒が受講した。前期の終わりに、受講者及び授業担当者に対して行ったアンケート調査によると、受講した生徒は、おおむね積極的に受講し、授業内容に満足し、その学問分野への興味関心が高まったと自己評価しており、受講料や情報伝達等のシステムに対しても高く評価している。しかし、例年に比べると、理解度についてはやや自己評価が低かった。受講後の感想として、53%の生徒が「大学の雰囲気や大学生活の様子がわかった」「高度で専門的な学習や実習ができてよかった」を選び、28%の生徒が「自らの進路決定に役立った」を選んだ。また、アンケートに回答した11名の授業担当者のうち、10名が高校生の受講態度を「良い」、1名が

「まあ良い」と評価している。一方、理解度については8名が「理解している」、2名が「まあ理解している」、1名が「あまり理解できていない」と評価しており、生徒の自己評価と一致する結果となった。

2005年度からの調査結果を踏まえ、あらかじめ授業の内容や難易度について、前年度受講した生徒からの情報を与えられるような形に、アンケート項目を変更することとした。

【教養基礎】

◇教養基礎 態度に関する調査

教養基礎科目として、1年次に「国語」Ⅰ、「数学」Ⅰ、「英語」Ⅰを、2年次に「国語」Ⅱ、「数学」Ⅱ、「英語」Ⅱを全員が履修することとしている。3年次には「古典読書」A、「古典読書」B、「数学」Ⅲ、「英語」Ⅲが開講されるが、これらは選択科目としている。

教養基礎プログラムでは、その教科、科目、分野への興味関心を喚起し、学習意欲を高め、自発的な学習行動を促すことを重視している。そのため、必修、選択を問わず開講している全ての科目において、生徒の学習態度に関する調査を実施している。調査結果については、大学、高校の関係者が検討会を行い、次年度のカリキュラムに反映させている。全体として、年を追うごとに、教養基礎科目に対する生徒の評価は高くなってきている。

2008年度の調査では、教養基礎「国語」Ⅰ・Ⅱの調査項目を改訂した。それにより、時代の流れに沿って授業が進んでいることを生徒により意識化させることができた。一方、授業に触発されて読んだ本があると答えた生徒が若干減少しており、今後の様子に注意していくこととなった。教養基礎「英語」Ⅰ・Ⅱ・Ⅲは、三教科の中でも特に自学自習を重視するカリキュラムとなっているため、学習意欲の喚起が課題となってきた。今年度は、リスニング教材をmp3形式で配布する、授業に自習教材を用いた会話練習を取り入れる、自分の学力に合った副読本の選び方を指導する等の試みを行った。教養基礎「数学」Ⅰ・Ⅱでは、感覚的にとらえられる実験や作図が好評なので、それらの時間を重視するカリキュラムを継続している。作図の課題について、別解を考えてきた生徒に発表させたところ「刺激になった」「私ももっと考えればよかった」等の反応があり、生徒同士の学び合いも有効であることが確認できた。また「数学」Ⅲではゼミ形式の授業を行うようになった。こうした授業内容の改変にともない、2009年度の英語と数学の調査項目を改訂することとなった。

◇教養基礎 学力に関する調査

教養基礎プログラムの成果を測る調査として、学力調査も行っている。学力調査は、それ

ぞれの教科が学年末に行っている。国語はレポートを作成させ、数学は独自の学力テストを行い、英語はベネッセの英語コミュニケーション能力テストを利用している。また、1年次7月、1月、2年次1月のベネッセ進研模試も学力調査として利用している。

今年度の検討会では、数学の学力調査を来年度より変更することが決まった。これまで年度末に実施してきた学力テストの実施時期を少し変更し、さらに單元ごと的小テストを新たに行うことにした。これにより、生徒の理解度をよりしっかりと評価し、カリキュラムに反映させていくことができると期待される。こうした学力調査、評価のさらなる充実も今後の課題の一つである。

【選択基礎】

2009年度は文教育学部比較歴史学、社会学、教育科学、理学部物理学、情報科学、生活科学部食物栄養学、人間・環境科学、発達臨床心理学各1名、文教育学部日本語・日本文学、心理学、理学部化学各2名、計14名の生徒が選択基礎を受講している。受講者を受け入れている学科等に対して、7月、11月、2月、3月にアンケート調査を行った。アンケートの内容は、それぞれの学科等で実施されている選択基礎の具体的な内容、指導状況に加えて、受講者の理解度や興味関心の高まりに関するものである。受講者の理解度や興味関心の高まりについては、理学部の選択基礎受講者らについて、分野によりばらつきがあるとの評価が見られた。11月の調査では1名の受講者について問題があると判断されていたが、14名全員が特別推薦入試を受験した。しかし、1名が不合格とされたため、選択基礎や特別推薦入試の仕組みそのものに問題や不備がないかどうか、確認作業を進めている。

また、受講者に対しては、2月末にアンケート調査を行った。受講者は、高校では学べない内容、より専門的な内容を学びたいとの動機から受講し、選択基礎の授業内容が時折難しいと感じているものの、選択基礎の授業には全員が満足し、その分野に対する興味関心が高まっていることがわかった。

【大学入学者についての追跡調査】

2008年度に入学した高大連携の第1期生8名について、大学での学習および生活の状況について面接調査を行った。いずれの学生も大学での学習や生活に適応していることがわかった。また、高校在学中に受けた教養基礎科目、特に教養基礎「国語」の授業が、現在の学習に役立っていることを自覚していることも確認できた。